

第4分科会

『生き抜く力を育む 心に響く保育とは ～自分自身を認め、自分を大切にする～』

指導助言者 重村 美帆 先生

(宇部フロンティア大学短期大学部准教授)

担 当 園 学校法人るんびに学園 第二るんびに幼稚園

司 会 者 渡邊 和憲 (第二るんびに幼稚園 園長)

発 表 者 徳田ひかる (第二るんびに幼稚園 教諭)

○テーマ設定理由

昨年、令和3年度満3歳児で入園してきたY児を中心として心身共に成長していく姿を『生き抜く力を育む 心に響く保育とは ～生き抜くための力を育てる～』という視点で研究を進めた。その中で見えてきた「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の「自立心」「協同性」の育ちが「生き抜く力」につながるのではないかとということが見えてきた。この「自立心」「協同性」の育ちは、子どもが自分自身を認めることで健全な自己肯定感の基盤となり、自分自身を大切にすることができる。と他者との関係も良好になり、安心して成長する環境が整うことで育まれるのではないかと考える。それは、私たちが取り組んでいる“まことの保育”の命の尊厳や相手を思いやるという、ともに心豊かに生きていくための基盤となる心の教育にもつながるものである。

昨今、自己肯定感の大切さが謳われることも多い。変化の激しい社会において、子ども自身が自分の存在や感情を大切に感じられるように、また、自分を肯定的に受け入れ、価値があると感じること、困難や挫折を乗り越え、自信をもって自分らしく生きられる子どもに育つためにはどのような働きかけがあるのかという次なる課題が浮かび上がった。

一人ひとりの子どもにはそれぞれ違う特性がある。そんな子どもたちが互いを認め合うためには、先ず自分自身を知ることが必要となる。がんばった自分、がんばることが出来なかった自分、成功した自分、失敗した自分…それは良い悪いではなく、それらすべてが自分であるということに気づき、そうすることでまた、他者に対しても良い部分、悪い部分を認め、共感しあえるのではないかと考える。

○研究の概要

「生き抜く力を育む 心に響く保育とは」を主題とし、昨年は一人の幼児(Y児)を対象に、【生き抜くための力を育てる】というテーマに沿って研究をした。自分自身を取り巻く様々な状況の中で不安や葛藤を抱きながらも、どのようにして乗り越えていくことができるのかを考えた。この研究を通して家庭内での保護者、幼稚園での保育者、友だちなどY児にかかわる人・物・事などの働きかけが生き抜く力を育てる糧となったと感じた。

今年度は副題に【自分自身を認め、自分を大切にする】というテーマを掲げた。Y児が今後自分の意志で行動し、問題を解決していくには、まずは自分と向き合うことが必要なのではないかと考えた。そこで園行事や事例を通してY児自身が自分を知り認めていく中で物事を成し遂げたり達成感を得られたりする姿から研究を深めていった。

事例①「お泊り保育」

年長7月にお泊り保育が行われた。Y児にとって初めての経験であり不安が大きい様子。お泊り保育初日は山遊びへ行き、共同炊飯。夜にはキャンプファイヤーを行う。翌日は海遊びをする。どの活動も不安な表情をするY児だったが、今回のお泊り保育で「自分のことは自分でする」をねらいとし不安や困っていることなど自分の言葉で保育者に伝え、自分で身の回りの環境や心を整える「自立心」、普段では経験の出来ないことを友だちや保育者と一緒に楽しむ「協調性」、それぞれを学び身につけることが出来た。

事例②「縄跳びチャレンジカード」

縄跳びを始めた頃のY児は思うように跳ぶことができず、保育者に見守られながら渋々縄跳びの練習に参加していた。夏休みの「縄跳びチャレンジカード」をきっかけに苦手なことにも毎日挑戦できるよう保護者がカードを作成し、運動会に向けての取り組みが始まった。運動会では自信を持って、長縄を披露することで成功体験に繋がり何事にも少しずつ前向きになってきた。

縄跳びチャレンジカードをするにあたって



①表やカードで分かりやすくする

②自分の好きなことを取り入れる

③自分なりの目標を持つ

⇒毎日継続して取り組めた！

これらがY児の意欲を引き出し、毎日継続して取り組むことへ繋げることができたのだと感じる。

事例③「運動会の練習」

運動会の活動の前の自由時間にY児は友達とゲームをして遊んでいた。ちょっとしたトラブルから言い合いになり、Y児の中で切り替えが出来ない様子があった。運動会の活動に参加することを拒み、保育者を叩いたり押したりして抵抗するY児。感情のコントロールが難しいY児の様子に別の保育者が関わり話を聞くことになった。Y児の中で友達とのトラブルについては気持ちが落ち着いてきたが、今度は運動会の不安や不満を訴えてきた。Y児が今抱えている感情を受け止めながら、その不安をどうすればよいのか一緒に考え、ネガティブな思いを一つ一つポジティブな言葉に変換して伝えた。

少しずつY児の気持ちが落ち着き、保育者の話にも耳を傾けて自分なりに解決することで前向きな姿勢になれたY児は、その後運動会の活動に参加し、自分の力で乗り越えることができた。運動会という大きな舞台に立てたことや他者と協力しながら頑張った成果が出せたこと、責任ある役割が果たせたことが『自分自身と向き合い、自分を認められる』経験になったように感じた。

事例④「豆まき」

節分が近づく1月20日頃から、不安を抱えながら登園する日々が続いていた。Y児の性格上、友達に泣いているところは見られたくない様子であるが早朝保育を利用しているため、保育者に対しては泣いて抵抗をしていた。保育者が着替えの援助をしても脱いで着替え直したり、園舎の門を出ようとしたり、日頃はしないような行動をしていた。豆まき当日は落ち着いて登園してきたように

見えたが、豆まき直前にわざと豆をこぼしたり階段を上げらず一人で教室に残るなどの行動が見られ、参加したくない気持ちを発散していた。そんなY児の姿を受け入れ、不安な気持ちに寄り添いながら声をかけ一緒にホールに入ることが出来た。

友だちには見せることができない自分の不安な気持ちを保育者と共有することで友だちが登園する時には自分で気持ちを切り替え、豆まきが始まると保育者の後ろに隠れながらもみんなと一緒に最後までその場で過ごすことが出来た。

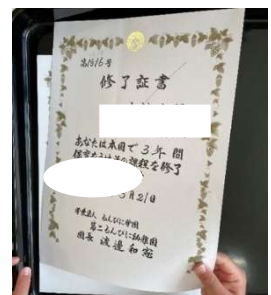
事例⑤「椅子取りゲームとフルーツバスケット」

卒園が近づいてきたことをきっかけにクラスみんなでフルーツバスケットをした。卒園を意識しているからか二学期にみんなで椅子取りゲームをした時よりも積極的にゲームに参加し楽しむY児。感情を表に出して表現することのなかったY児だが、様々な経験を通して自立心を身に付け、勝つことの良さを認め、負けることも悪いことではない、負けることも経験として大切なことを学んだ。様々な経験を通して心の豊かさを得ながら、成功体験を増やしていくことで自分自身を成長させる活動となった。

❖クラスでの全員遊びに積極的に参加するようになる⇒勝負心が身に付いた

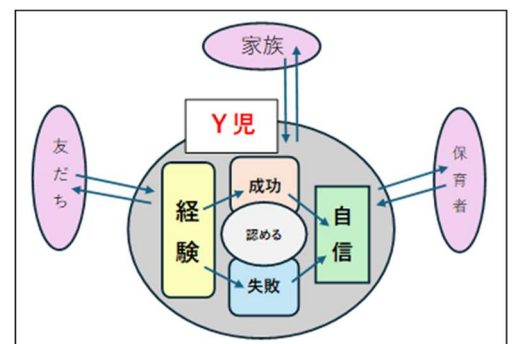
事例⑥「卒園式を通して見られたY児の様子」

人前に出て表現活動をすることに苦手意識を持っていたY児だが、卒園式だけはいつものY児と違い登園渋りも見られなかった。卒園児代表で卒園証書を受け取る役も任されていたが、練習を通じて見通しを持つことが出来たからか落ち着いた様子が見られた。保育者がありのままのY児を受け入れ、人前に出て代表の役割を果たせたことを認め、褒めたことでY児の自己肯定感を高め、Y児にとっての自信へと繋げた。成功体験を増やしていくことで自分自身を認めるY児の姿を見ることができた。



「生き抜く力を育む 心に響く保育とは」何かについて考えてきた。人前に出ることを苦手としていたY児がどのように活動に楽しんで参加することが出来るのかを「自立心」と「協同性」を身につけながら学んできた。ネガティブな思考をポジティブな思考へと換え、子どもたちの思いを大切にしながら意欲や興味を生かせるように保育の計画を立て、環境づくりを行い子どもたちの活動を見守ること、様々な経験を通して成功や失敗を踏まえながら自分の良い部分も悪い部分も認め、自己肯定感を上げながらまた新しいことに挑戦したいと思う心を育てていくことができる環境構成をすることは保育者としての課題であり続けると考える。

今後も家族、友だち、保育者との関わりを増やしていく中で、互いに心を開くことで自分も相手も大切にできる子どもたちを育てる保育、また、自分のこころとも向き合いながら、子どもたちと共に歩み、子どもたちの小さな気づきや言葉に耳を傾け、共に喜び、共に悩みながら育っていく保育を目指し、子どもたちの「生き抜く力」を育てていきたいと思う。



○話題提供の趣旨

幼稚園教育要領解説において「幼児一人一人の潜在的な可能性は、日々の生活の中で出会う環境によって開かれ、環境との相互作用を通して具現化されていく。幼児は、環境との相互作用の中で、体験を深め、そのことが幼児の心を揺り動かし、次の活動を引き起こす。そうした体験の連なりが幾筋も生まれ、幼児の将来へとつながっていく。」

本分科会の研究発表では、一人の子どもの姿に着目し、その姿から「自分で自分を認める」過程を考察した。子ども自身がどのような環境（モノ・ヒト・コト）を通して自己を肯定していくのか、年長児の発達の道筋を捉え直しながら考える。

○自己肯定感

「社会で生きていく人間として、子どもの発達において特に大切なのは、人との関わりである。乳児期において、子どもは身近にいる特定の保育士等による愛情豊で受容的・応答的な関りを通して、相手との間に愛着関係を形成し、これを拠りどころとして、人に対する基本的信頼感を培っていく。また自分が、かけがえのない存在であり、周囲の大人から愛され、受け入れられ、認められていることを実感し、自己肯定感を育んでいく」

（厚生労働省編「保育所保育指針解説」より）

- ・ねぎらいシャワー（鈴木八郎著より）

自分の行っていることを肯定的な視点でとらえることを目的とする。

- ・二つの意味を持つ自己肯定感（今井和子著より）

「自己信頼」… 自信を養い自分の価値を感じる力

「他者信頼」… 周囲の人との信頼関係の中で培われる

○感情が安定し我慢する力が育つ5・6歳児（今井和子著より）

- ① 集団だからこそ育つ「話し合い」

自分の意見を言うばかりでなく、友達の話聞くこと、友達の思いをしっかり聞いて、それから自分の思いを伝えて一緒に考え合う、そういった姿勢を身に付けながら自分たちでいろいろな問題や課題を解決していく力を養っていく。

- ② 年長児のごっこ遊び

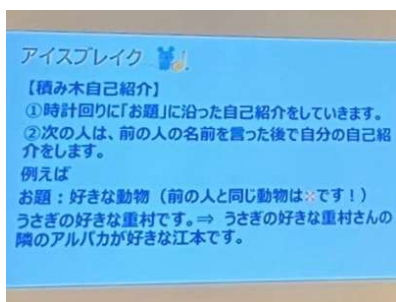
ごっこ遊びは、日常の自分から離れてどれだけ自由に生きられるか、解放的な世界で自分の願いを友達と共有して作り出す。

自分のイメージしたことを表現できる力、それを理解してくれる友達の存在によって、ごっこ遊びは成立する。

- ③ 自然と親しむことが心の栄養になる

植物が太陽の光や熱、雨などで育つように、人間にも自然の恵みが欠かせない。日光や雨、風、雪、新鮮な空気などが丈夫な体や心の栄養になる。

こうした命あるものに出会い触れ合うことで人間は人間らしく育っていく。命あるものと一緒に生活し、自分自身が生きている実感を得られ、それが自己肯定感を育むことになる。



～積み木式自己紹介～

参加者の名前や特徴を繰り返すことでグループの場が和み、皆さん自然と笑顔が溢れグループ討議がスムーズに行えた。

グループ討議の様子

研究活動の中で見られたY児の一場面の様子を、総勢約80名が12グループに分かれ意見交換をした。
話し合った内容はグループごとに発表した。

【ワーク】この写真からY君の「認められたい」「認められた」思いを考えてみる。



- ① Y君が自分を信頼してできたことは何か？
- ② Y君が「認められた」と実感するために保育者が出来る関りはどのようなことか？

【グループ討議の内容】

- ① ・ルールを知っていることでみんなの前で説明が出来た
→友達みんなが自分の話を最後まで聞いてくれた、頼ってもらえた
- ・サッカーを経験していることの自信、安心感
→見通しをもって楽しめているという実感が持てる
友達にアドバイスが出来た
- ・クラスみんなで楽しく活動できた
→自分のチームが負けとしても素直に受け止め、相手チームの頑張りを認められた
友達とサッカーをすることを喜び、楽しさを共有できた
- ② ・ルール説明やお手本をみんなの前でしてもらう
→気持ちを共感し共感、受け入れられることで安心して参加が出来るようにする
- ・Y君のおかげでみんなが楽しめたことを伝える
→称賛され感謝の気持ちを伝えられることで自信につながる
- ・悔しい気持ちに共感し、Y君を中心に作戦を立てることを提案する
→友達や自分と向き合い、みんなと協力し達成感が味わえる
- ・頑張った姿を認める
→心から楽しめたという達成感を味わい成功体験を積む



今回の研究における面白さ

◎一人の子どもに着目してその成長を追い続けたこと

【自分との葛藤の中で多様性が育まれていく】

Y君の抱える思い「望ましい姿」と「ありのままの自分でいたい」という両方の願いが様々な場面で葛藤していた。Y君の思いを受容し、共感し、周りの人と共有し続けていくことでY君自身が「今、ここにいる自分」を認める機会が持続して保証された点が素晴らしい。

◎保護者との情報共有

【保護者とともに自己肯定感を育む】

Y君の保護者と園との協力的で良好な関係が素晴らしかった。家庭と園でそれぞれ「できること」を考え、試行し、協働し続けていることで、自分を受け止めてくれる感覚を保障し続けることができたと考える。

→【保護者とともに自己肯定感を育む】

◎職員間の情報共有と対話の機会

【同僚性をもつ力】

今回の研究においてY君の担任保育者だけではなく、園全体の保育者間でY君の姿を追ったことにより、Y君とそのまわりにいる子どもの姿や担任以外の保育者とかかわる様子を通して、多面的なY君の育ちを考察することができた。その際にもっとも大切なことが「対話」である。自分たちの気づきを持ち寄り、対話することを通して保育者一人一人の「読み取る」力が育まれた。

→【同僚性をもつ力】

おわりに



Y児という一人の子どもの姿を継続して考察、分析したことで、目の前の子どもが今、どのようなことに興味や関心をもっているのかということだけではなく、その年齢で発達しつつある能力にも目を向け、「主体性」「自己肯定感」という子どもの発達の道筋を辿ることにもなった。

このようにすればこのように育つという短絡的なものではないが、今回の研究結果から子どもが自分で自分を認め、肯定していく力を育むためには、その子の主体性を尊重すると共に、その子自身を受け止め、認め、対話し続けることが重要であることが示唆されたと言える。